

あいづちの心的効果について

稲 井 文

1 問題と目的

あいづちとは、会話場面において会話参加者が発する短い発話や非言語行動などを指すものである。あいづちは国語学における話しことばへの関心の高まりを背景に、特に1980年代から盛んに研究されるようになり、様々な知見が得られている。水谷（2001）は日本語会話の単位である句の後のポーズ（休止時間）にあいづちが打たれ、話し手と聞き手がともに会話を作っていくスタイルが日本人の会話の特長であると指摘している。また、英語会話と比較すると、日本人はアメリカ人より多くあいづちを打つ（メイナード1993、久保田1994）。このような特徴からは、あいづちが日本語会話の構造を作る重要な要素であり、かつ日本人の文化的な特徴と何らかの関わりを持っていることがうかがえる。また、あいづちを定義したものとして黒崎（1987）の「話者の発話に対して、肯否等の判断を表明することなく、ただ単に『聞いていますよ』『分かりますよ』という信号を送る段階の応答表現を相づちと呼ぶ」、水谷（1988）の「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手がいれるもの」などがあることからわかるように、あいづちの機能の一つは聞き手が話し手に対して「聞いていますよ」とか「そこまではわかった」というメッセージを発して会話の進行を促したり助けたりすることである。従って、あいづちをたくさん打つということは、話し手自身を丁重にもてなす態度を頻繁に示して、会話参加者間の関係を親和的な方向に調整するということであるともいえる。このような観点に立てば、あいづちは日本人の親和を尊ぶ文化のありかたを反映していると同時に会話参加者間の関係のありかたに深いつながりをもっていると考えられる。

このように、これまでの研究を通じてあいづちの文化的側面や、話し言葉における役割や、会話参加者の関係調整において果たすあいづちの役割などが指摘されている。しかし、従来のあいづち研究は国語学上の関心から進められることが多く、あいづちが会話に参加する個人内においてどのような心的効果をもつのか、さらには会話参加者個人の心的側面がいかに関係性に反映され、会話参加者間の関係に影響していくか、などの心理的な観点からあいづちに関する知見を深めていくことは今後の課題であると思われる。

本研究は以上の点をうけ、あいづちの心的効果に関する知見を深めることを目的としている。まず、本研究を進める上で何をあいづちと考えるかについて述べる。本研究は大まかにいえばあいづちが心的側面において果たす機能に関するものなので、形式からあいづちを定義した代表的なものであるメイナード（1993）の「『あいづち』とは話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語行動も含む）で、短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる

反応を示したものは、あいづちとしない」にしたがう。この定義にある「聞き手が送る短い表現」のうち、発話によってなされるものにも様々あるが、本研究ではマドセンら（1999）と陳（2001）における発声のあいづちの分類を参考に「うん」「ふん」「はい」「はあ」「ええ」「へえ」「そう」「そうですか」などを発声のあいづちの具体的なものとして考える。メイナード（1993）の定義にもあるように、あいづち研究において各種の非言語行動をあいづちに含めることは多いが、共通して取り上げられるのはうなずきである。うなずきは発話のあいづちと共起することも多く（杉戸1988）、発話のあいづちに代わってあいづちの機能を果たす（堀口1991）などが指摘されていることから、非言語的なあいづちのなかでも重要であると考え、本研究では非言語的なあいづちとして特にうなずきを取り上げることとした。

次に、あいづちの心的効果のどの側面に焦点を当てるかについてであるが、本研究ではあいづちの発信者である聞き手におけるあいづちの心的効果を特に取り上げる。あいづちを発信しているのは聞き手であることから、あいづちの心的効果に迫るためには、聞き手にとってどのような心的効果があるのかを明らかにすることがまず重要であろうと考えたためである。聞き手にとってのあいづちの心的効果に関する研究は必ずしも多いとはいえないが、その中でも陳（2000）らは聞き手が話題に対して肯定的な思いを抱いているときにはあいづちの頻度が高くなり、話題に対して否定的な思いを抱いているときにはあいづちの頻度が低くなることを示している。この結果からは、話の内容に対する聞き手の感想やそのときの体験があいづちに関わることがうかがえる。これら聞き手の感想・体験とあいづちの関係は、あいづちという現象そのものを考えるのに示唆を与える特に重要な観点であると考えられる。そこで、本研究では心的効果のなかでも特に聞き手の感想や体験などの側面があいづちとどう関連するかについて、さらに詳細に検討することとした。また方法としては、聞き手におけるあいづちの心的効果をより明確に把握するため、あいづちを打ちながら話を聞いた場合とあいづちを抑制して話を聞いた場合で、話に対する聞き手の主観的な感想や体験がどのように違うか比較検討する手法を用いることにした。また、本研究において扱う聞き手の感想や体験はごく主観的なものであり、定量的に測定するのみでは把握しにくい面もあることなどから、分析においては質的・探索的な手法も用いることとした。

2 方 法

2-1 調査の概要

調査は表1のような順序で行われた。なお、体験インタビューよりも感想インタビューを先に行ったのは、語りに対する感想のほうが体験よりも失われやすいと考えられるからである。

2-2 被験者

被験者として協力したのは学部学生60人であり、あいづち群30人の被験者の平均年齢は20.30歳（S.D.=1.44）、あいづち抑制群30人の被験者の平均年齢は20.63歳（S.D.=1.97）であった。またそれぞれの群の性別はカウンターバランスされた。

2-3 材料

質問票は、（配置された順に）表紙、語り段階での感情の状態を測定するための「多面的感情状態尺度」（寺崎ら1992）の短縮版、語り段階での調査者に関する印象を測定するための「特性

形容詞尺度」(林1978), 語り段階での被験者の注意の方向を測定するために筆者が作成した「会話場面における注意方向尺度」, 語り段階を想起して記入する想起記入用紙, 感想記入用紙, 個人情報記入用紙から構成されていた。また, それぞれの尺度の項目はカウンターバランスされた。

語り段階で用いられる内容は, できるだけあいづちの役割が重要となるようなものでなければならぬと考え, “思い出話”(資料1, 末尾に添付)を用意し語り方も会話らしくなるようにした。語られる内容が調査者の個人的なエピソードであると被験者が思えば, 被験者はより親和的な雰囲気を作ろうとし, あいづちの役割がさらに重要となり両群が比較しやすくなるであろう。また, 語りの段階に要する時間はあいづち抑制条件の被験者の負担も考慮して5,6分が適当と判断し話の長さを設定した。

2-4 手続き

語り段階では調査者が被験者に“思い出話”を一对一で語る様子を, ポータブルMDレコーダーによって録音し, デジタルビデオによって録画した。調査者と被験者は1mほど離れた肘掛け椅子にそれぞれ腰掛け, デジタルビデオはそれぞれから2.5mほど離れたところ

の一つ, ポータブルMDレコーダーは調査者と被験者の間に一つ設置した。まず調査者が被験者に教示を与えた後, 調査者が“思い出話”を5,6分にわたって被験者に語った。あいづち群への教示は「これから私の思い出話を聞いてもらって, そこを録画録音させていただきます。その後に質問票に記入してもらって, インタビューをさせていただきます。話を聞いているときにいろいろな質問・疑問・意見が出てくると思いますが, 後でお聞きますので, とりあえずは聞き役になってください。」というものであった。また, あいづち抑制群へは, あいづち群と同様の教示に加えて「ただし, 話を聞いているときにあいづちを打たないでください。あいづちとはうなずきと「うん」「ふん」「はい」「はあ」「ええ」「へえ」「そう」「そうですか」などの短い発話です。」という教示を与えた。調査者の練習効果を考慮し, あいづち条件とあいづち抑制条件の調査はできるだけ交互に行った。また, 語りの内容は予め用意したものにできるだけ合わせて語った。語り段階が終了すると, 録

表1 調査の概要

1. 語り段階

(調査者が被験者に“思い出話”を一对一で語り, その様子を録画・録音する。被験者はあいづち群とあいづち抑制群に分けられる。)

2. 質問表記入段階

3. 感想インタビュー段階

(“思い出話”に関する被験者の感想を聞き録音。)

4. 体験インタビュー段階

(語り段階での被験者の体験を聞き録音。)

表2 体験インタビューでの質問項目

あいづち群	抑制群
・調査をやってみてどうでしたか?	・調査をやってみてどうでしたか?
・あいづちを意識していましたか?	・うなずきと発声のあいづちの違いを感じましたか?
・うなずきと発声のあいづちの違いを感じましたか?	・うなずきと発声のあいづちはどちらが我慢しにくかったですか?
・先ほど話を聞いていたときと、普通に話を聞くときの違いは何ですか?	・あいづちをうちながら話を聞いたときとの違いは何ですか?
・話し手の振る舞いについて気になったことはありましたか?	・話し手の振る舞いについて気になったことはありましたか?

音・録画機器のスイッチをとめ、被検者に質問票を記入してもらった。質問票記入が終わってからインタビューを行った。感想インタビューでは“思い出話”を内容のまとまりにしたがって18のパートにわけ、「それぞれのパートを聞いていたときに感じたことや考えたこと」をインタビューし、ポータブルMDレコーダーを用いて録音した。体験インタビューでは、予め用意した質問項目に関して聞き、調査者が語り段階で気づいたことや被検者の自由な感想なども聞き同様に録音した。体験インタビューでの質問項目は表2に示した。

3 結 果

以下、結果と考察の項においては体験インタビューに関する考察をもとに感想インタビューの考察を行うので、体験インタビューに関する記述を先に行う。また、本論文の目的及び紙面上の制約を鑑み、インタビューの質的・探索的検討を中心に行うこととし、以下、質問票のデータと語り段階での録音・録画データに関する記述は割愛する。

3-1 体験インタビューについて

3-1-1 体験インタビューの分析方法

まず、体験インタビューの録音記録を文字資料にし、それをもとに分析を行った。体験インタビューの分析にあたって、体験インタビューの文字資料に見つけられる限りの情報のまとまりを一つ一つカードに記載した。さらに、被験者の体験を漏らさずとらえるために、感想インタビューにおいて語り段階での体験について語っている部分や、調査票の感想記述も同様にカード化した。結果、被験者一人当たりのインタビューから得られるカードの数は一定ではなかった。各群の総カード数、カード数平均、SD、最少数、最大数を表3に示した。体験インタビューでは一つの質問項目での被験者の報告が他の質問項目に関わるものであることもあった。そこで被験者の体験全体を捉えるために質問項目ごとにカテゴリーを作るのではなく、カード全体を一まとまりにしてそこからカテゴリーを作っていた。まず、似ているカードをまとめて下位カテゴリーを作り表題をつけた。さらに、より解釈しやすいように下位カテゴリーをまとめて上位カテゴリーを作り表題をつけた。そしてカード数に関わらず本研究の目的にかなうように語り段階でのあいづち抑制群の体験や、発声のあいづちとうなずきの違いに関するカテゴリーをとりあげ検討した。

3-1-2 語り段階でのあいづち抑制群の体験

あいづち抑制群の体験に関わる上位カテゴリーとして「あいづちを打たないことに対する辛さ」「身体的・心理的束縛感」「話し手との関係をめぐる苦慮」「注意散漫さ」「臨場感の低下」が得られた。あいづちなし群の体験についての情報の上位・下位カテゴリーとそのカテゴリーを答えた各群での人数を表4に示した。

「あいづちを打たないことに対する辛さ」に関して補足すると、このような辛さは語り段階の最初のほうで顕著に感じられるようであった。さらにこのような辛さは、発声のあいづちよりもうなずきを我慢するときに感じられることが多いようだった。

表3 体験インタビュー基礎データ

	あいづち群	抑制群
カード総数	215	303
平均	7.41	9.77
SD	2.10	4.24
最少数	2	4
最大数	11	21

表4 体験インタビューのカテゴリー

上位カテゴリー	下位カテゴリー	あいづち群	抑制群
あいづちをうたない辛さ	・ あいづちをうたないのは辛い・難しい	0	4
	・ 意識しなくてもやっていること・普通のことかできないので辛い	0	6
	・ 思ったことを表現できないのが辛い	0	5
身体的・心理的束縛感	・ 体が動かしにくく硬くなった	0	7
	・ あいづち以外の表現もできない	0	4
	・ 窮屈・制約されている感じ	0	5
話し手との関係をめぐる苦慮	・ 話し手に失礼だ、気の毒だ	0	5
	・ 話し手の気持を気遣う	2	7
	・ 話を聞いていることが話し手に伝わらない不安	1	7
	・ 自分が悪い人間のように嫌	0	6
注意散漫さ	・ あいづちをうたないようにするのに注意が向き話に集中できなかった	0	7
臨場感の低下	・ 臨場感がもてなかった	0	4
	・ 話に入れなかった	0	5

「心理的・身体的束縛感」に関して補足すると、笑ったり驚いたりすると、体の動きが出たり、声が出てしまいそうになるので表情が出しにくかったということであった。

また、「臨場感の低下」とは、具体的には「(話を)共有はしていない感じ」「テレビを見たりラジオを聴くような感じ」などの報告をまとめたものである。

3-1-3 発声のあいづちとうなずき

発声のあいづちとうなずきに関する情報について「あいづちの抑制しやすさ」「あいづち群にとっての発声のあいづちとうなずきの違い」「あいづち群で発声のあいづちが出なかった場合の理由」などの上位カテゴリーが得られた。発声のあいづちとうなずきに関する上位・下位カテゴリーとそのカテゴリーを答えた各群での人数を表5に示した。

体験インタビューでは、あいづち抑制群の被験者に対して、発声のあいづちとうなずきのどちらが我慢しにくかったか聞いた。両あいづちとも我慢しにくいようであったが、どちらかといえは発声のあいづちはうなずきよりは抑制できるのに対して、うなずきは少なくとも容易には抑制できないようであった。

あいづち群への体験インタビューから「聞き手の思いが動いたときに発声のあいづちが発せられる」という下位カテゴリーが得られた。具体的には、「相手の話に合わせて自分もそういう気持ちになったとき」「びっくりしたとき」「意外にも話が切り替わったとき」などに発声のあいづちが出たという報告をまとめたものである。また、「発声のあいづちには聞き手の主張がこめられる」という下位カテゴリーは「発声するときのほうが意思表示している感じがする」などの報告をまとめたものである。

表5 発声のあいづちとうなずきについてのカテゴリー

上位カテゴリー	下位カテゴリー	あいづち群	抑制群
あいづちの抑制しやすさ	・発声のあいづちもうなずきもどちらも抑制しにくい	0	6
	・発声のあいづちよりもうなずきのほうが抑制しにくい	0	16
あいづち群にとっての発声のあいづちとうなずきの違い	・聞き手の気持が動いたときにあいづちが出る	4	0
	・発声のあいづちには聞き手の主張がこめられる	3	0
あいづち群で発声のあいづちが出なかった場合の理由	・教示を聞いて何も言っていけないと思った	5	0
	・発声のあいづちが話の邪魔にならと思った	4	0

あいづち群では、語り段階で発声のあいづちをあまりしない人がいた。中には、教示を与える時やインタビュー中には発声のあいづちをするにもかかわらず、語り段階で発声のあいづちをしない人もいた。このような被験者に、なぜ語り段階で発声のあいづちをしなかったのか報告を求め、そこから「教示を聞いて何も言っていけないと思った」「発声のあいづちが話の邪魔にならと思った」などの下位カテゴリーが得られた。

3-2 感想インタビューについて

3-2-1 感想インタビューの分析方法

最初に、話の内容に対してどのような感想が比較的多く報告されたかを検討した。まず感想インタビューの録音記録を文字資料にした。そして“思い出話”を内容のまとまりから18のパートに分け、それ

表6 感想インタビューカード基礎データ

パート		1	2	3	4	5	6	7	8	9
あいづち群	合計	30	34	33	44	52	44	30	33	34
	平均	1.00	1.13	1.10	1.47	1.73	1.47	1.00	1.10	1.13
	SD	0.00	0.35	0.31	0.57	0.52	0.57	0.00	0.31	0.35
	最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大値	1	2	2	3	3	3	1	2	2
抑制群	合計	30	36	32	41	49	46	31	33	30
	平均	1.00	1.20	1.07	1.47	1.63	1.53	1.03	1.10	1.00
	SD	0.00	0.41	0.25	0.56	0.56	0.68	0.18	0.40	0.00
	最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大値	1	2	2	3	3	3	2	3	1
パート		10	11	12	13	14	15	16	17	18
あいづち群	合計	32	53	38	35	33	39	33	41	39
	平均	1.07	1.77	1.27	1.17	1.10	1.30	1.10	1.37	1.30
	SD	0.25	0.73	0.45	0.38	0.31	0.53	0.40	0.56	0.47
	最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大値	2	4	2	2	2	3	3	3	2
抑制群	合計	33	52	39	30	32	37	33	40	36
	平均	1.10	1.73	1.30	1.00	1.07	1.23	1.10	1.33	1.20
	SD	0.31	0.58	0.53	0.00	0.25	0.50	0.31	0.55	0.41
	最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大値	2	3	3	1	2	3	2	3	2

それぞれのパートに対する被験者の報告をカード化した。カード化するに当たっては、被験者が語ったことのなかに見つけられる情報のまとまりを一つ一つカードに記載した。従って、パートごと、被験者ごとに作られるカード数は一定ではなかった。表6に各パート、各群のカードの合計数、カード数平均、SD、最大数、最小数を示した。

次に、それぞれのパートごとに、両群の別をつけず、内容的に似ているカードをまとめてカテゴリーを作り表題をつけた。そして、次のようにしてパートごとに各群の各カテゴリーの%を算出した。

「あいづち群（抑制群）のあるカテゴリーのカード数

÷当該パートのあいづち群（抑制群）の総カード数×100（%）」

表7 感想インタビューのカテゴリー

パート	感想カテゴリー	あいづち群			抑制群		
		人数	カード数順位	カード数%	人数	カード数順位	カード数%
①	内容に対する感想は特にない。	12	1	40.00	14	1	46.00
②	*引越す前はどこにいたのかと思う。	14	1	41.18	3	5	8.30
	あいづちをしないでいる体験について。	0	0	0.00	9	1	25.00
③	自分の引越し経験を参照した。	10	1	30.30	8	2	25.00
	内容に対する感想は特にない。	6	2	18.15	15	1	47.25
④	滋賀は田舎ということから思ったこと。	16	1	36.36	13	1	32.50
⑤	*熊が出ることに驚いた。	13	1	25.00	3	5	6.12
	内容に対する感想は特にない。	7	3	13.46	12	1	24.49
⑦	話し手の語ることが「わかるなあ」と思った。	11	1	36.67	11	1	35.48
⑧	*話の展開に興味を持ったり想像したりした。	20	1	60.61	11	1	33.33
⑨	内容に対する感想は特にない。	3	3	8.82	6	1	20.00
⑩	ヨットとボートの違いは知っている、間違わないと思った。	7	1	21.88	14	1	42.42
⑪	風景を想像した。	8	2	15.09	11	1	21.15
⑫	*風景を想像した。	23	1	60.53	15	1	38.46
⑬	滋賀県が好きになったことに納得した。	7	1	20.00	3	3	10.00
	内容に対する感想は特にない。	6	3	17.14	11	1	36.66
⑭	驚いたりどうしてだろうと思った。	24	1	72.73	21	1	65.63
⑮	*大変だなと思った。	11	1	28.21	4	3	10.81
⑯	部活をやめる理由として納得した。	7	1	21.21	7	1	21.21
⑰	小さいころはそういうことがあると思った。	81		20.00	0	0	0.00
	内容に対する感想は特にない。	5	2	12.50	11	1	26.83
⑱	内容に対する感想は特にない。	10	1	25.64	15	1	41.67

次に、比較的多く報告された感想をそれぞれの群ごとに抽出した。比較的多く報告されるカテゴリーであるかどうかの判断は、カード数が当該パートにおけるその群の総カード数の20%以上を占めることを基準とした。20%を基準としたのは以下の理由による。つまり、各パートにおけるあいづち群の総カード数平均は37.61枚 (SD=6.88)、あいづち抑制群の総カード数平均は36.67枚 (S.D.=6.69) であったので、それぞれ総カード数の20%はおおよそ7枚となり、これよりカード数が下回るカテゴリーを多く報告されるとするのは不適切と判断したからである。あいづち群と抑制群でどのような報告が比較的多く得られたかを示すため、各パートについて、カード数がいずれかの群で最も多く、かつ、カード数%が20%以上を占めたカテゴリーを表7に記載した。なお、カード数順位とはそのパートにおけるその群の中での順位であり、カード数%とはそのパートにおける各群の総カード数にしめる割合をあらわしている。

次に、それぞれのパートであいづち群におけるカード数が20%を超えておりかつ最も多く報告された感想が、あいづち抑制群でも同程度の比率で報告されるかどうかを検討した。あいづち群の感想について、当該パートであいづち群のカード数の%が最も大きく、かつその%が20%以上であるカテゴリーがあったのは18のパートのうち15のパートであった。そして、あいづち群と抑制群で、そのカテゴリーに分類されるような感想を報告した人の人数とそのような報告をしなかった人の人数の比率に差があるかどうかを χ^2 検定によって検討した結果、5つのパートで人数の比率に有意な差があった。表7においては、あいづち群の人数と抑制群の人数に有意な差があったカテゴリーに*をつけている。

3-2-2 両群の感想にみられる違い

パート②では、あいづち群の被験者のうち14人が「(話し手が) 引越す前はどこにいたのかと思った」というカテゴリーに分類される感想を報告した。一方、あいづち抑制群で同様の報告をしたのは3人であり、 χ^2 検定の結果、二群の間でこの報告をした人としなかった人の人数比率には有意な差があった ($\chi^2(1)=9.93$, $p<.05$)。このことから、あいづち抑制群では語られた内容に関して疑問を持ったり、話されていない情報を知りたいと思うことがあいづち群より少ない場合があるとわかる。

パート⑤では、あいづち群の被験者のうち13人が「熊が出ることに驚いた」というカテゴリーに分類される感想を報告していた。一方、あいづち抑制群で同様の報告をしたのは3人であり、 χ^2 検定の結果、二群の間でこの報告をした人としなかった人の人数比率には有意な差があった ($\chi^2(1)=8.52$, $p<.01$)。このことから、あいづち抑制群では話を聞いていても情動が動きにくい場合があるとわかる。

パート⑧では、あいづち群の被験者のうち20人が「話の展開に興味を持ったり想像したりした」というカテゴリーに分類される感想を報告した。一方、あいづち抑制群で同様の報告をしたのは11人であり、 χ^2 検定の結果、二群の間でこの報告をした人としなかった人の人数比率には有意な差があった ($\chi^2(1)=10.66$, $p<.01$)。このことから、あいづち抑制群では話の展開に興味を持ったり想像したりしにくくなる場合があるとわかる。

パート⑫では、あいづち群の被験者のうち23人が「風景を想像した」というカテゴリーに分類される感想を報告した。一方、あいづち抑制群で同様の報告をしたのは15人であり、 χ^2 検定の結果、二群の間でこの報告をした人としなかった人の人数比率には有意な差があった ($\chi^2(1)=$

4.59, $p < .05$)。このことから、あいづち抑制群では語られた情景を想像しにくい場合があるとわかる。

パート⑮では、あいづち群の被験者のうち11人が「大変だなと思った」というカテゴリーに分類される感想を報告した。一方、あいづち抑制群で同様の報告をしたのは4人であり、 χ^2 検定の結果、二群の間でこの報告をした人としなかった人の人数比率には有意な差があった ($\chi^2(1) = 4.36$, $p < .05$)。「大変だなと思った」というカテゴリーは、天候が厳しい時に琵琶湖に出るという内容を聞いて、「意外に思った」「それは大変なことだと思った」などの感想を含むカテゴリーであり、あいづち抑制群では語られる内容を想像した上での感想を抱きにくい場合があることがわかる。

ところで、18のパートを通して見た場合に両群で最も大きく違っていたのは、あいづち抑制群で「内容に対する感想は特にない」というカテゴリーが、一位ではなくとも、たびたび大きな%を占めることであった。そこで、18のパートの中で「内容に対する感想は特にない」というカテゴリーが20%以上を占めるパートとそうでないパートの比率が両群で違うかどうかを検討した。あいづち群については「内容に対する感想は特にない」というカテゴリーが20%以上を占めるパートは2つあり、抑制群については9つあった。 χ^2 検定の結果、二群の間で「内容に対する感想は特にない」というカテゴリーが20%以上を占めたパートとそうでないパートの比率には有意な差があった ($\chi^2(1) = 5.46$, $p < .05$)。

4 考 察

4-1 語り段階での体験について

あいづち抑制群の被験者にあいづちをしないでみてどうだったかと聞くと、「つらい」「難しい」など報告することがあった。あいづちをしないでいる大変さの原因の一つは、相手の話を聞いていれば自然と出てくるあいづちを抑えねばならないということ自体である。特にうなずきを我慢することに苦痛を感じる人が多かったのは、うなずきが普段は意識されずほとんど自動的に生じるものであるからかもしれない。自分の身体に注意が向き、表情や体が硬直して、自由のきかない感じを持つなど、身体的・心理的束縛感を感じたと解釈できる報告もあったが、これらは普段は意識せず自然に生じるうなずきを抑制するために過度に身体に注意が向けられ緊張感が高まったことを示していると考えられる。あいづち抑制条件でつらさを感じたことの理由として、思ったことを表現できない不快感を挙げた人もあった。その一方で、あいづち群も話を聞いている間に意見を言わないように教示されていたにも関わらず、このような報告はあまりみられなかった。このようなことからあいづち群は、あいづちを打つことによって思ったことを表現し発散するという効果を得ていたのかもしれない。

あいづち抑制群の被験者は話し手との関係をめぐってさまざまな苦痛を感じていたようである。このような報告があったのは、あいづちをしないということが会話場面でのある種のルールを破ることになるからではないだろうか。そのルールとは例えば、「聞き手に話を聞いてもらえないと話し手は嫌な思いをするものである」「相手が話しているときは聞いているという態度をとらなければならない」とか、もっと基本的には「相手とは親和的な関係を保たねばならない」

といったものである。一方、あいづち群では話し手との関係を苦慮するという報告はほとんどなかった。恐らく、あいづちを打っていれば先に述べた会話場面のルールを努力せずとも守れるのだろう。あいづちを打つことで話し相手との良好な関係を保ち、相手との関係について過度に思い悩まずに済むのである。

あいづち抑制群では、話に集中できなかったという報告があった。これまで述べてきたように、あいづちを打たないように努めて身体に注意が向かうこと自体があいづち群にとっては負担であるようだった。それに加えて、話し手との関係を苦慮して不安や動揺を生じ、話を聞けない状態になったのではないだろうか。ただしあいづちを抑える大変さは語り段階の前半に顕著であり、後に述べるように、話の流れによっては語りの内容に即応して驚きを感じるなど、あいづち抑制群が語り段階の間中ずっと注意散漫だったわけではなく、不安や動揺がいつどれほど影響したかは確かめられなかった。

あいづち抑制群では、少数ではあるが「(話を) 共有していない感じ」「テレビを見たりラジオを聞くような感じ」であるとして自身の体験を表現した人がいた。また、「話に入れなかった」という報告もあった。このような報告は、話をしている相手が目の前にいるにも関わらず、相手が語ることが共有できないという状態を表現しているものであり、先に述べた集中力の低下だけでは説明しにくいだろう。このように、あいづち抑制群ではあいづちをしないように努めることで、そのときその場に生じる関係の中で相手と融和し、相手が語ることが自分自身が体験するかのように生き生きと味わえない場合があると考えられる。

4-2 発声のあいづちとうなずきの差について

あいづち抑制群の報告をもとに発声のあいづちとうなずきを比較した場合、うなずきを抑制するほうが難しいということがわかった。このような違いは、先述したようにうなずきがほとんど自動的にうたれるのに対して、発声のあいづちが意識的に調整できることから生じているのではないだろうか。また、あいづち群の報告から、発声のあいづちは聞き手の感情が動いたときに生じる場合があることや、発声のあいづちに聞き手の主張がこめられる場合があることが推察できた。あいづち条件で発声のあいづちが出ないことがあったのは、聞き役という受動的な態度を取らねばならないと思って、主張性のある発声のあいづちを打たなかったからかもしれない。

以上のことから発声のあいづちとうなずきを比較すると、発声のあいづちは聞き手の意見や感情を他の会話参加者にむかって(うなずきよりは)積極的に表現するものであり、ある程度は意図的に調整できるのに対して、うなずきはほとんど意図せず生じるもので抑制することは難しいという差があるといえる。

4-3 語りに対する感想について

あいづち群とあいづち抑制群で感想に差があったパートを検討したところ、あいづち抑制群では話の内容に関して疑問を感じにくく話されていない情報に興味を持ちにくい場合があること、話を聞いていても驚きを感じにくい場合があること、話の展開に興味を持ったり想像しにくくなる場合があること、語られた情景を想像しにくくなる場合があること、想像にもとづく感想を抱きにくい場合があることなどが示された。ただし、パートによっては必ずしもそうでない場合があった。例えば、パート⑭では両群とも同程度に驚きを感じていた。このようにパートによって両群の感想に差があったりなかったりするの、時間的経過や話の展開という要素が感想に影響

を与えているからではないだろうか。

パート②とパート⑤で感想に差があったのは、次のように説明できる。②においてあいづち抑制群に多かったカテゴリーは、「あいづちをしないでいる体験について語る」というものだった。このカテゴリーは「あいづちをしないでいることに注意が向き語りに集中できなかった」などの報告をまとめたものである。このように答えた被検者に、集中できないことがどこまで続いていたか聞くと、パート⑥やパート⑨のところまでと答える人がいた。そのことから考えると、⑤の時点でも被検者が話に集中できない状態が続いていたのではないだろうか。あいづち抑制群の中でも人によってばらつきはあるかもしれないが、少なくとも話が始まってすぐの段階では、語りの内容に注意を向ける余裕がなく、最初の方に位置するパート②で疑問や興味を持ちにくく、またパート⑤で驚きを報告することが少なかったのではないだろうか。

パート⑧で両群に差があったのは文脈の要素を考え合わせると説明できるだろう。このパートの直前は、「⑦鉢植えが枯れて悲しかったのはもといたところとのつながり、名残がなくなるように感じたからだ」というパートであり、両群とも「話し手の語ることが『分かるなあ』と思った」という感想が比較的多く得られている。両群とも鉢植えのエピソードを聞いて「分かるなあ」と思い、しみりした気持ちが生じやすかったのではないだろうか。そして、あいづち抑制群ではそのような感慨から気持ちを切り替えられずに、直後のパート⑧で“話の展開に興味を持ったり想像したりした”という感想が少なかったのかもしれない。同様のことはパート⑫についてもいえる。このパートの直前は「⑭ヨットをやめた」という内容であり、両群とも同程度に驚きを感じていた。そして、あいづち抑制群ではその気持ちを切り替えられずに、悪天で船を出すという内容を聞いても「大変だなと思った」という感想をもつ人が比較的少なかったのではないだろうか。このようにして、あいづち抑制群では、なんらかの強い印象をもった後に想像が膨らみにくく、話の内容に即応した感想や感情が生じにくかったのかもしれない。

パート⑫において、あいづち抑制群の「情景を思い浮かべた」という感想が比較的少なかったのは文脈の効果などを考慮しても説明できない。しかし、このパートにおいてあいづち群が「情景を思い浮かべた」と報告することが多かったために（30人中23人が報告している）、もともとあまり情景が想像できなかったあいづち抑制群との差が出たのではないだろうか。

あいづち群と比較したときのあいづち抑制群の感想の特徴は「内容に対する感想は特にない」という報告が全てのパートを通して比較的多いことである。このカテゴリーは、「そのときにどう思っていたのか忘れた」「何も思わなかった」「ただ話を受け止めた」など、そのとき思っていたことや感じていたことがはっきりしない報告をまとめたカテゴリーである。あいづち抑制群では先述のような注意散漫さによって感想を覚えていられなくなったのかもしれない。また、ただ話を受け止めたとか、感想はない、などの報告は感想自体が沸きにくかったことを示しているのかもしれない。

5 まとめと展望

以上、聞き手の感じ考えることに対してあいづちが果たす効果について考察を行った。本研究で明らかにされたことの一つは、被験者のあいづちを抑制すると話の内容に対する感想が報告さ

れにくくなったり、強い印象を惹起するエピソードの直後に想像が膨らみにくかったり、感情が動きにくくなったりすることであった。全体として、あいづちをうたない聞き手は話に即応して生き生きと想像し共感することが難しかったと考えられる。また一方で、あいづちは聞き手の感じ考えたことを表現し発散する役割もあると考察した。あいづちが聞き手の感慨の表現として機能するならば、そのような表現を抑止したことによって、語りに即応した感想が持ちにくくなった可能性がある。語られたことを理解し共感するためには、話を受動的に聞くばかりではなく、話の内容に即応した感慨を聞き手自身の声や身振りなどの振舞いを通して味わうことが必要なのではないだろうか。このようにしてあいづちは聞き手自身の思いを発散しつつ、かつ聞き手自身の内面に起こる感慨や想像を味わう媒体となっているのかもしれない。

先行研究にも示されていたように、本研究でもあいづちが会話参加者の関係調整に重要な役割を果たしていることが裏付けられた。あいづちは話し手の語りを促進するような肯定的メッセージを送るので、あいづちを打つことによって親和的な関係が自動的に維持されると考えられているが、ドナル（1988）はこのことに関連して、聞き手が真面目に話し手の言うことを聞いていなくても、あいづちを話し手の音声的な弱まり（ポーズのこと：筆者）に打てば不適切にならないので、ほんやりした者でも聞き手の役割が果たせるのだ、と述べている。逆にいえば、会話場面においては親和的な関係を維持する機能を持ったあいづちをほとんど自動的に打つことによって、話し手に気を使って話を聞くことに全神経を向けずにすみ、聞き手自身の考えが自由に動く範囲を確保しているのかもしれない。つまり、あいづちは会話場面において聞き手が自分自身の想像を膨らませつつ主体的に聞くことと会話参加者の関係維持を両立させ調節しているとも考えられる。そのため、あいづちを抑制すると語り手との関係を苦慮して、想像を膨らませる自由を奪われ無感動になりがちだったのかもしれない。先述したような聞き手の感慨を味わう媒体としての役割とあわせ、あいづちはさまざまに聞き手の会話理解や共感を支えている可能性がある。

一方で、あいづち抑制群ではあいづちをうたないという課題をこなすことで生じた緊張や注意散漫さも報告されている。従って、すでに述べてきた想像力の減退や無感動があいづちを抑制したことからの程度直接にもたらされたものであるかは明確ではない。この点をうけ、今後はあいづち以外のゼスチャーを抑制した群との比較検討を行うことも必要であると考えられる。また、本研究はあいづちを発信する側である聞き手に焦点を当てて検討したが、今後はさらに広げて話し手にとってどのような心的効果がもたらされるのか、そしてあいづちが会話参加者間の関係にどのような効果があるのかさらに検討することができだろう。

引用文献

- 久保田真弓 2001 聞き手のコミュニケーション上の機能としての「確認のあいづち」 日本語教育, 108, 14-23.
黒崎良昭 1987 談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について— 国語学, 150, 122-109.
杉戸清樹 1988 ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現— 日本語教育, 67, 48-59.
泉子・K・メイナード 1993 会話分析 くろしお出版.
陳姿菁 2000 話題に対する聞き手の心的態度が発話のあいづちとうなずきの出現に及ぼす影響 人

間文化論叢, 3, 237-246.

陳姿菁 2001 日本語の談話におけるあいづちの種類とその仕組み 日本語教育, 108, 24-33.

フランス・ドヌル 1988 フランス語におけるあいづちの機能 日本語学, 7, 38-45.

寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.

林文俊 1978 特性形容詞尺度 堀弘道(監修) 吉田富二雄(編) 2001 心理学測定尺度集Ⅱ
サイエンス社 5-9.

堀口純子 1991 あいづち研究の現段階と課題 日本語学, 10, 31-41.

水谷信子 1988 あいづち論 日本語学, 7, 4-11.

水谷信子 2001 あいづちとポーズの心理学 言語, 30, 46-53.

ヤスコ・ナガノ・マドセン・杉藤美代子 1999 東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその
運用 日本語科学, 5, 26-45.

付 記

本論文は京都大学教育学研究科に提出した2002年度修士論文の一部をもとに加筆、修正したものである。論文作成にあたりご指導いただいた東山紘久教授に謝意を表します。また、調査に協力してくださった多くの方々へ心よりお礼申し上げます。

資料 1

① 思い出話させていただくってことだったんですけど、引越の話をして。② 私 滋賀県出身なんですけど、もともと滋賀県にいたんじゃなくて、小学校から中学校にあがるときに別のところから引っ越したんです。③ 新しい家建てたんで引っ越したんで、引っ越す前は楽しみでうれしかったんです。④ でも引っ越したら滋賀県にいるのが嫌で嫌で。ていうのは、滋賀県は田舎だなあって思ってた。⑤ 熊が出るような山んなかに家があったし、不便だったんです。家が駅から遠くってあまり本数もなくて。⑥ 小学校の卒業式のときにこういう洋菊の鉢植えをもらったんですけど、それが引っ越してからどんどん枯れていったんです。毎日水をやっても。それを毎日みてたら悲しくなったのを覚えてるんですけど。⑦ ただ植物が枯れていくのが悲しいっていうんじゃないで、もといたとことつながってるもんっていうか、もといたとこの名残みたいなのがなくなっていく感じがしたのかなと今は思うんですけど。⑧ そんな感じで中学校三年間は滋賀県が嫌だったんですけど、高校に入ってからそれが変わったんです。⑨ きっかけは高校に入ってからヨット部に入ったことだったんですけど。⑩ ヨットっていうのは帆に風を受けて揚力で進むもので、よくオールでこぐボートと間違われるんですけど、違うものなんですけど。⑪ とにかく風がないと進まないもんだから、風のない日は艇庫、っていうのは競艇の艇に倉庫の庫って書くんですけど、風がない日は艇庫の前で琵琶湖をばーっと見ながら風が出るのを待つんです。⑫ 琵琶湖広がってるのをぼんやりみて、波打ち際で波がこうびちゃびちゃやってるし、空は広いし、ヨットで琵琶湖にでたらでたで、琵琶湖も空もずーっと広がってるっていう。⑬ そういうのを見てたら琵琶湖が好きになって、それでその琵琶湖のある滋賀県も好きになれたんじゃないかと思ってるんですけど。⑭ ちなみにヨットの方はすぐに止めてしまったんですけど。⑮ 穏やかな日はいいんですけど、冬で雪が降ってる日も出ないといけないし、嵐の中で船が倒れて危ない目にもあったんで。⑯ それにクラブの人とあわなかったっていうのもあったと思うんですけど。⑰ で 話戻って、引越して変わったことがあって、小学生だったし、それまでいたとこで自分の住所は知ってても、地図の中でどこに住んでるかっていうことはちっとも意識してなかったんです。⑱ で、引越してもいたとことの地域差とか距離感とか分かってきて、どうい土地のなかのどこに住んでるのかっていうことがわかってきた感じがしてるんです。

(博士後期課程2回生、臨床実践学講座)

(受稿2004年9月9日、改稿2004年11月19日、受理2004年11月30日)

A Study about psychological function of back-channels

INAI Aya

Back-channels are the listener's responses in conversation, containing short utterance and nonverbal behavior. Back-channels have been studied for the past few decades, mainly in the field of linguistics. This paper has attended to clarify the psychological function of back-channels. First, each subject was instructed to listen to a story, which was narrated in this experiment. At this stage, the subjects were divided into two groups. One group was instructed not to express back-channels and the other instructed just to listen to the story. In the next stage, they measured some scales and then the subjects were interviewed on how they had felt and thought while they listened to the story. The dates of the two groups were compared with each other. Consequently, some functions of back-channels were discovered; Back-channels may help listeners to feel their feeling for themselves; there is a qualitative difference between the vocal utterances and nods and back-channels may contribute to the compatibility of listening behavior within the regulation of relationship between the participants of conversation. In this manner, this paper expands the comprehension of psychological functions of back-channels.